

# 食品安全委員会が新たな体制で始動 委員からのメッセージ

新体制の食品安全委員会がスタートして3か月。熊谷委員長には委員会運営で力を入れていきたいこと、また各委員には委員としての抱負をお聞きしました。



くま がい すずむ  
**熊谷 進** 委員長  
微生物学の分野

皆様、今後とも食品安全委員会の活動にご理解とご協力をよろしくお願ひいたします。

## ● 新しい委員構成のもとで二つの活動を軸に推進

本年7月、食品安全委員会は7名の委員のうち5名が交代しました。それに伴い、従来1名だった委員長代理を佐藤、山添、三森の三氏にお願いし、リスク評価をはじめとする委員会運営全般がよりスムーズに進むようにしました。食品安全委員会は来年で設立10周年を迎えるということもあり、長期的な視野で運営のあり方を考える一つの機会ではないかと思っています。まだ構想段階のものもありますが、刷新された体制のもとで委員長として次の2分野にぜひ力を入れたいと思っています。

一つは、当委員会の大きな使命であるリスク評価分野です。限られた予算・人員の中で評価作業をより効率的に行わなければなりません。同時に質のさらなる向上をめざし、また国際的な連携のもとで食の安全の確保に貢献することが重要と考えます。

もう一つは、リスクコミュニケーションの強化です。リスク評価機関が行うリスクコミュニケーションはどのようであるべきなのか、改めて考えてみたいと思います。

## 食品安全委員会新体制下での二つの方向性

### ● リスク評価の効率化と質の向上

- 社会で不測の事態が発生してもリスク評価作業が停滞しない体制づくり
- 日本のリスク評価結果を海外発信する機能の強化
- 研究機関・大学・学会などとの共催による学術イベントの開催
- リスク評価を担える次世代専門家の育成

### ● リスクコミュニケーションの強化

- 社会の幅広い層を対象にした情報発信に向けたメディアとの関係強化
- オピニオンリーダーと連携した食品安全に関する科学的知識の発信・普及
- 児童・生徒・学生への食品安全教育の側面支援

## ● リスク評価は知見の蓄積があつてこそ

私は、魚介類などに含まれるメチル水銀のリスク評価をきっかけに食品安全委員会と関わってきました。食べ物というのは、環境の一つとして捉えることができるのではないかと考えています。物を食べるということは環境中に存在する、人間にとって不要な化学物質や汚染物質なども私たちの体に入ってくるということです。それだからこそ、リスク評価を行い、食品の安全性をしっかりと考えることは大変重要なことです。科学というのは、自然界の大きな現象を部分ごとに見るものですが、逆に、部分を積み上げていって全体を正確に類推するのは非常にむずかしいことです。科学的に解明するには時間がかかります。一度に多くはわかりません。だから、時間のかかる自然解明過程で得られる科学的知見を活用してリスク評価しているのだということを、常に意識したいと思います。



さ とう ひろし  
**佐藤 洋** 委員長代理  
新任:公衆衛生学の分野

## ● 多様な意見を引き出し充実のリスク評価へ

私は、薬学分野で大学や米国食品医薬品庁(FDA)などで変化に富んだ研究生活をしてきました。そこで感じたのは、他の専門家が提示したどんな研究情報も自分で再確認することの大切さでした。添加物などの化学物質のリスク評価も、評価に使うデータなどをきちんと確認して行うことが重要です。また、遺伝子組換え食品などのリスク評価分野では、年々蓄積される科学的知見をもとに、世界中でよりよい評価方法が模索されています。化学物質の評価にもいえませんが、科学の進歩を取り入れながら、いかにすみやかに現時点での判断を下すかが、食品安全委員会の真価を問われるところだと思います。そのために、委員として、専門調査会で多くの専門家に有益な意見を出していただけるようにサポートし、食品安全委員会での十分な議論と最終的な判断につなげるように力を尽くしたいと思います。



やま ぞえ やすし  
**山添 康** 委員長代理  
新任:化学物質(有機化学)の分野

## ● 食べ物だからこそ安全性の議論は十分に

当委員会には12の専門調査会がありますが、その約半分が化学物質関連です。そこでの議論の最重要ポイントの一つが「発がん性の有無」です。私は、国立医薬品食品衛生研究所、残留農薬の研究機関、大学などで化学物質の発がんメカニズムを研究してきましたので、今までの研究経験を生かして食品安全にお役に立てたらと思っています。



みつ もり くにとし  
**三森 国敏** 委員長代理  
新任:毒性学の分野

発がん物質には、遺伝子を傷つけてしまう「遺伝毒性発がん物質」と遺伝子を傷つけない「非遺伝毒性発がん物質」がありますが、後者は無毒性量が設定できるとはいえ、発がんメカニズムを明確にした上で安全性を評価していかなければなりません。そのため会議に向けて確認する資料も膨大です。私たち委員は分担してすべての専門調査会の審議に関わるので、私も十分な安全性議論ができるよう、科学論文やリスク評価資料に目を通す毎日です。

## ● 日常の出来事を科学の目で見るとお手伝いを

福島と千葉の大学で家庭科教育に携わってきました。その一つである調理学は、生活の中で食べ物を安全にいただくための学問と言えます。一方、当委員会のリスク評価は日常とはかけ離れた科学的作業とも言えます。ただ、調理学もリスク評価も安全に食品を食べ健康を保つ社会をつくるという大目的は共通です。食べ物の安全性を科学的にどう見るのかということと、どのように生活するかという価値観と両面が必要ではないでしょうか。消費者の方にはもっと日常の出来事を科学の目で見つめてほしいと思います。そのような機会づくりに当委員会のリスクコミュニケーションがお役に立てたらと思っています。「食事をおいしく食べることで人は身体的にも精神的にも満たされる」こと。これが私の基本でありたいと思います。



いし い かつ え  
**石井 克枝** 委員  
新任:消費者意識の分野

## ● 当委員会と社会との柔軟なつなぎ手に

NHKでアナウンサーやディレクターを経験した私は、番組作りの中で伝統的な暮らしやありふれた日常を通して、各地の食生活・食文化に触れてきました。番組制作で培った生活者目線で、当委員会の諸活動に携わっていこうと思います。たとえば、科学的なリスク評価が生活の現場に最終的にどう浸透していくのかを見届けたいと思います。そして、リスク評価結果やそれに付随した情報を日常の言葉で語る、委員会と社会の「柔軟なつなぎ手」でありたいです。柔軟であることは、実は番組作りにとっても大切なのです。番組制作には始めに頭で描いたシナリオを制作過程で出てきた事実に合わせて何度も何度も作り変える作業が不可欠です。思い込みのない柔らかな姿勢でめげずに試行錯誤しながら、メディアを含む外の世界と当委員会との良好な関係づくりに貢献したいと思っています。



かみ やす ひら きよ こ  
**上安平 洌子** 委員  
新任:情報交流の分野

## ● 公正なリスク評価のために食品学者の目を

私は委員2期目になります。大学でも、主に食品の品質に関する生化学および微生物学を専門としています。特に、食品の加工・貯蔵に関する分野で、食品の変色という観点から研究しています。科学的に食品を見ていなかった時代は、食経験だけで安全かどうかを判断していました。変色は食品の鮮度と関係し食品選択の指標になりますが、色や匂いが変わらなくても危険なものはありますし、変わっても安全なものもあります。現在では食品も分子レベルで分析されるようになり、安全性についてはリスク評価で客観的に判断され、合理的なリスク管理も可能になっています。リスク評価は人の健康影響を見ているので、毒性学、化学、微生物学などが大きな位置を占めます。私は食品学者の立場から意見を言い、リスクの公正な評価ができるように尽力したいと考えています。



むら た まさ つね  
**村田 容常** 委員  
2期目:生産・流通システムの分野